死神サークル I

人助け

春日信彦

目次

1

奨学金返済

学生は、ここ 1 週間、最も安く入れる生命保険を探すため、ネット検索していた。そして、生命保険の勉強にもなると思い、コスモ生命医療保険の資料をネットで取り寄せた。すると、資料到着の翌日、オペレーターから面談予約の電話があった。まずは、資料で生命保険の内容を勉強しようと思ったが、話を聞いて勉強するのもありと思い、3 日後の午前 10 時に面談の約束をした。学生は、前日に 1K の部屋を小ぎれいに片付けようと思ったが、片付けるスペースがないため、乱雑に書籍を散らかした部屋で面談することにした。約束の午前 10 時、1 分前に、インターホンが鳴った。ドアを開くとショートヘアの 20 代と見える若い生保レディが立っていた。

彼女は、笑顔で挨拶した。「コスモ生命の羽多と申します。よろしくお願いします」彼女は、目の前の汚らしい部屋を目にしたが、平常心を取り戻し、小さな声で尋ねた。「上がらせてもらっても、よろしいですか？」学生は、頭をかきながら、「は～、テーブルもないんですが」彼女は、別に気にする様子もなく、上がり込み、部屋中央の小さなスペースに正座した。即座に、学生も両手をそろえて正面に正座した。「早速、ご説明いたします」彼女は、黒いバッグから手慣れた手つきで資料を取り出し、学生の正面に差し出した。「医療保険をご希望でいらっしゃいますね」学生は、小さくうなずき返事した。「は、はい。まだ、学生の身分なんですが、内定が決まったもので、保険に入っておこうかなと思って」

彼女は、ニコッと笑顔を作った。ほんの少し、間をおいて返事した。「すごくしっかりなされてますね。年齢をお聞きしてもよろしいですか?」学生は、静かな声で返事した。「23 才です」彼女は、タブレットで保険料を算出した。「本日、加入されますか？」意外な質問に学生の顔が固まった。「いや、まだ、今日は、話を聞きたいと思いまして」彼女は、うなずきながら、体を左右に揺らした。足に痛みを感じた彼女は、顔をしかめてお願いした。「できれば、隣のスタバでご説明させていただけませんか?」足の痛みを感じ始めていた学生も、彼女の気持ちを察した。「は～。はい」二人は、顔をしかめながらゆっくり立ち上がった。二人はマンションを出ると 30 メートルほど北側にある道路沿いのスタバまで歩いた。

2

窓ガラス越しに店内を覗くと入って右奥のテーブルが空いていた。ホットを注文し、テーブルに着くと早速、彼女は説明を開始した。「ご病気、ケガで入院されますと、1 日につき、1 万円が支給されます。一回の入院につき、60 日まで支給されます。入院中に手術なされた場合、20 万円支給されます。回数は無制限です。先進医療の治療を受けられた場合、2000 万円を限度に支給されます」学生は、うなずきながら、しばらく説明に聞き入っていたが、実のところ、医療保険はどうでもよかった。彼の真の加入目的は、死亡保険だった。学生は、説明を中断するように、質問した。「ところで、死亡した場合は、どうなるんですか?」彼女は、即座に返事した。「医療保険では、死亡保険金は支払われません。入院、手術、先進医療のみの保障です」学生は、気まずそうに返事した。「死亡保険金も欲しいんですが」彼女は即座に返事した。「はい、定期保険ですね。10 年定期でよろしいですか?」学生は、無意識にうなずいた。

彼女は、定期保険の資料を取り出し、彼の目の前に差し出した。「こちらの 10 年定期保険は、ご病気で死亡なされた場合、死亡保険金 1000 万円が支給されます。掛け金については、10 年ごとに更新され、10 年後の年齢で掛け金が算出されます。医療保険、定期保険は、ともに掛け金がお安くなっておりますが、掛け捨てなので解約なされた場合、解約金はございません」学生は、大きくうなずいた。「はい。死んだら、1000 万、もらえるんですね。いいですね。死んだら、お得なんですね」彼女は怪訝な顔つきで返事した。「免責事項がございまして、ご契約後、3 年以内に被保険者が自殺された場合や保険金受取人による被保険者殺害の場合、死亡保険金は支払われません」学生は、大きくうなずいた。「もっともですね。自殺は、いけませんね。でも、3 年、ってなぜですかね」彼女は、顔をしかめ返事した。「その点は、わかりかねます」

学生は、左手でコーヒーカップを手に取るとゆっくりと口に運んだ。自殺願望があって、保険に加入しようとしているのではないか、と彼女は勘繰った。「自殺はいけません。でも、最近、若い方の自殺による保険金の支払いが増加しています。早く、コロナ禍がなくなればいいですね」学生は、表情を変えることなく沈黙していた。保険金目当ての加入ではないかと直感した彼女は、加入動機を確認することにした。「まだ、学生さんということですから、今回は、医療保険に加入なされ、ご就職なされてから、定期保険にご加入されるのが、よろしいかと思います。いかがですか?」学生の視線は宙に浮いていた。3 年以内の自殺はダメか。学生は、がっかりした表情で返事した。「そうですね。でも、人って、いつ死ぬかわかりませんよね。就職する前に死んだらどうしよう」

3

今の返事で、ますます、不安になった。彼のよどんだ瞳から、もしかしたら、うつ病ではないかと察した。「確かに、保険は、万が一のために入るものです。でも、保険は、無病息災のお守りでもあるんです。そう悲観的に考えられずに、今回は、入院なされた場合を考えられてはいかがですか?」学生は、コーヒーをすすり、しばらく黙り込んだ。車にはねられ、頭から血を流し、白目をむいてる自分の姿が、一瞬、学生の脳裏に浮かんだ。学生は、心でつぶやいた。交通事故で亡くなれば、もっと保険金がもらえるはず。「交通事故で亡くなった場合、いくらもらえますか?」彼女の顔が、一瞬引きつった。間違いない、自殺願望がある。適当に返事して、この場を立ち去りたくなった。「交通事故の場合ですね。災害割増特約を 1000 万付加した場合、普通死亡保険金 1000 万に、災害割増特約の保険金 1000 万が加算されますので、合計 2000 万支払われます」

学生は、小さな笑顔を作り、さらに質問した。「2000 万も、交通事故で死ぬと、かなりお得ですね。例えばですが、がけから転落した場合は、どうですか?」眉間にしわを寄せた彼女は、即座に返事した。「不慮の事故であれば、支払われます」彼は、目を輝かせてた。「要は、3 年以内の自殺事故でなければ、支払われるってことですよね」やはり、ちょっと、学生の精神状態は変だと感じたが、素直に返事した。「はい」学生は、彼女と目を合わせず、独り言を言うようにうつむいてつぶやいた。「医療保険もいいけど、定期保険も捨てがたいですね。一寸先は、闇ですからね。内定取り消しになったやつがいるんです。コロナ禍、って恐ろしいですね。僕も、内定取り消しになるかも?そうなったら、どうしよう。7 月以降、新卒採用中止の企業が増えてるんです。俺たちって、ついてないっすよね」

彼女は、H 旅行会社に勤めていたが、今年の 5 月、コロナ禍によるリストラにあっていた。風俗よりましだと思い、やむなく、7 月から生命保険会社の外交に再就職していた。「確かに、コロナ禍で、就職が難しくなっています。こんなことを言うのは、どうかと思いますが、実を言うと、私も、リストラにあいました。それで、やむなく、保険の外交をやっています。今のところ、事務職に転職できるまで、頑張ろうと思っています」ちょっとまずいことを言ったと反省した彼女は、保険の話に戻した。「余計なことを言いました。どうでしょ、医療保険だけですと、月々の掛け金は、1940 円になります。この金額だと、ご負担がないかと思います。いかがですか?」

4

学生は、彼女と目を合わせ、返事した。「は〜、でも、死んだときのことも考えて、死亡保険も欲しいです。先ほど言われた定期保険を加えるといくらになりますか?」彼女は、タブレットで素早く算出した。「医療保険料に定期保険料を加えますと、3530 円になります」学生は、ニコッと笑顔を浮かべた。「3530 円ですか、安いんですね。これだったら、払えなくもありません。ちょっと考えさせてもらってもいいですか?一週間以内に、ご返事します」彼女は、ゆっくりうなずいた。保険に加入してもらえれば、ノルマの消化になると思ったが、自殺願望があるような若者を加入させてもいいものかと不安になった。彼女は、しばらく学生の暗い表情を見つめていた。現在、何らかの病気に罹患していた場合、保険に加入できない。もしかしたら、病院に通っているかもしれないと思い、健康状態を聞くことにした。「ところで、加入に際して、現在の健康状態の告知が必要なんですが、ご健康でいらっしゃいますか?」

彼の顔が、一瞬引きつった。「え、今ですか?病気なんかしてません。いたって、健康です。薬も飲んでないし。カゼにも、新型コロナにも、かかっていません。健康だけが取り柄なんです」彼女は、加入を拒否できる返事を得ようとさらに質問した。「2 年以内に、入院されたことはありませんか?」マジな顔つきで返事した。「ありません。悪いのは、視力と頭だけです」彼女は、一瞬、噴き出しそうになったが、笑顔で返事した。「健康状態は、問題無し、ということですね。それでは、ご返事をお待ちしています。失礼いたします」彼女は、頭を下げて、立ち上がった。

学生は、とっさに言葉をかけた。「もう、お帰りですか?」彼女は、意味がよくわからなかった。「何か、ご質問でも?ご加入のご返事をいただければ、手続きに参ります。引き落としの方法ですが・・」そう言いかけて、彼女は、腰を落とした。「引き落とし方法ですが、口座振替とクレジットがございます。口座振替の場合は、口座の印鑑、クレジットの場合は、クレジットカードをご用意ください」学生は、不安げな表情で、悩みを話し始めた。「はい。ちょっと、聞いてもらえますか?悩みがあるんです。奨学金の返済が、できなかったら、どうなるんでしょうか？ もし、内定取り消しになって、就職できず、バイトも見つからなかったら、どうなるんだろう、そんなこと思っていると、最近、眠られないんです」

5

ちょっと厄介な学生に引っかかったと顔をしかめた。顔色も悪く、うつ病みたいだし、もしかして、ひきこもりではないか？ とりあえず、軽く返事することにした。「そう、心配なさらないで。大丈夫ですよ。人生は、プラス思考、しなくっちゃ」学生は、彼女をにらみつけたが、すぐに、表情を緩めた。「そうですかね・・僕の先輩は、リストラにあって、どうにか見つけたバイト先の飲食店も、9 月に倒産して、今、家賃も払えず、追い出されるかもって、それに、食べるお金もない、と泣きつかれたんです。それで、少ないお小遣いから、3000 円貸したんです。僕も、こんな目に合うかと思うと・・」とんでもない話を聞かされたと思ったが、そうですかと言って立ち去るのも気の毒になった。「そう、私に、相談されても、私も、リストラにあって、貧乏してます。でも、仕事を選ばなければ、なんとなりますよ。セールスは、大変です。でも、やるしかないんです」

人生をあきらめてしまったような弱々しい返事が返ってきた。「は～～。あなたは、強いんですね。僕は、ダメです。陰気で、気が弱くて、頭も悪い。顔は、ブサイク。彼女もできない。あ～～、もう、ダメだ」世の中には、こうも気が弱い男性がいるものなのかとあきれてしまった。リストラにあったわけでもなく、運が良ければ、出世も夢ではない。少し励ますことにした。「とにかく、やるしかないんです。男子でしょ。当たって砕けろですよ。次の予定があるので、失礼します」彼は、うつむいた顔を持ち上げ、彼女の顔を見つめた。「ありがとうございます。励ましていただいて。母に、頑張れ、頑張れって、励まされ、勉強したんです。でも、第一志望は不合格でした。一浪して、やっと、第三志望に・・ヤッパ、ダメなんです。僕の人生」

国立大学だし、頭はいい。真面目が取り柄って感じ。やはり、まじめすぎるうつ病。おそらく、事務職はできても、営業職はムリかも。こんなに暗いんじゃ、相手が引いてしまう。顔もいまいちだし、背は低い。モテないタイプ。悩むのも無理はない。保険の勧誘に来たのに、人生相談。自分のことで精いっぱいで、他人のことなど心配していられるかよ、といいたいところ。でも、こんなに気が弱い男子を見てると同情したくなる。よくない性格だが、どうしようもない。子供のころ、子猫の捨て猫を 3 回も拾って帰った

ことがあった。親にきつく叱られたが、かわいそうと思うと放っておけなくなる。ダメダメ、同情は、かえって人を傷つける。心を鬼にして、立ち去らなければ。

6

彼女が下っ腹に気合を込めて立ち去ろうとした時、学生は、懇願するような表情で言葉を発した。「アップルパイ、おいしいですよね。食べませんか?」唐突な誘いに目を丸くしたが、アップルパイの響きが気持ちを緩めてしまった。学生の相談には、辟易したが、スイーツをおごってくれるのであれば、相手をしてあげてもいいかと笑顔を作った。彼女がいないと言っていたから、女性との会話がうれしいに違いない。気楽に、相手をしてあげることにした。「え、アップルパイ、おごってくれるの?」学生は、笑顔で返事した。「はい。お急ぎでなかったら、いかがですか?」次の約束があると言った手前、断ろうかと思ったが、次の約束が午後のため、アップルパイをいただくことにした。「まあ〜、まだ、時間はあります。せっかくだから、いただきます」

アップルパイとコーヒーを運んできた学生は、はにかんだ表情で話し始めた。「今日は、くだらない愚痴を聞いていただいて、ありがとうございました。僕のこと、変な学生と思われたでしょ。僕は、人生をあきらめているんです。僕には、夢も、目標もないんです。周りに合わせて生きているつまんない人生なんです」やはり、かなり病んでるように感じ取られた。そこで、内定が取れたことをほめることにした。「そう自分を責めなくても。内定ゲットできたんでしょ。よかったじゃないですか。まだ、内定が取れてない学生は、たくさんいると思いますよ。ラッキーじゃないですか」学生は、ラッキーといわれ顔をしかめた。「そうでしょうかね〜。希望の企業は、ダメでした。でも、内定が取れた会社に行きます。奨学金を返済しなくてなりませんから」

彼女も奨学金の返済のために働かざるを得なかった。ほとんどの人は、何らかの借金返済のために働いているように思えた。奨学金の返済、車のローン、カードローン、クレジット返済、考えれば、借金生活。でも、生きていくためには、借金をせざるを得ない。「私も、奨学金の返済のために働いているようなものです。でも、奨学金のおかげで大学を卒業できたわけですから、感謝してます。借金生活だって、気の持ちようです。生きていれば、楽しいこともあるじゃないですか。友達とカラオケ行ったり、たわいもない

ことをだべって、笑ったり、泣いたり。気の合う友達と旅行したり。大好きなスイーツを食べ歩きしたり。今日は、ラッキーだわ。アップルパイいただけて」

7

学生は、眉間にしわを寄せて、未来を思い浮かべてみた。生きていれば楽しいこともあるのか？ 自分にとって、どんなことが楽しいことか考えてみたが、思い当たらなかった。親友といえるほどの友達も、デートできる彼女もいない。将来結婚できるのか?一生独身かもしれない。死ぬまで、ボッチか?彼女は、きっと、彼氏がいて、デートを楽しんでいるに違いない。恋愛を楽しんでいるから、楽しいことがあると言っている。「楽しいことですか。楽しいことがある人が、うらやましいです。僕は、ただ、しょうがなく、生きているだけです。つまんない人生です。生きていたいとも思いません。就職すれば、朝起きて、会社に行って、夜遅く帰ってきて、メシ食って、翌日になれば、また、会社に行って、その繰り返し。そして、年を取って、死ぬ。これって、楽しいことですかね」

学生の話を聞いているとおいしいアップルパイがまずくなってきた。これは、かなりの重症。精神科に行ったほうがいいのではと一瞬思ったが、意外と、このように思っている学生は多いのではないか。うつ病なのか?ひきこもりのようでもある。「確かに、生きてる限りは、仕事しなくっちゃね。でも、将来、家族をもって、子供ができれば、それが、生きがいになるんじゃない。私は、子供は、3 人は欲しい。アラサーといわれるまでに結婚したいのよね～～」学生は、自分の結婚のことを考えたことがなかった。彼女はいない。デートもしたことがない。結婚できるはずがない。きっと、一生、独身。女性の未来には、家族があるのか。男性はどうだろう?僕の周りの男子は、だれ一人、家族のことなど話さない。単位のこと、就職のこと、部活のこと、こんなことぐらいだ。全く味気ない話題。

学生は、孤独な自分を特別な人間だと決めつけてはいなかったが、味気ない人間だと自覚していた。人づきあいが嫌いで、ボッチ生活になれているため、孤独死を受け入れていた。「家族ですか?結婚するってことですよね。僕には、ムリですね。別に、いいで

すけど」彼女は心でつぶやいた。特段、励ます義務はない。でも、このままだと、自殺するのでは？ これも、何かの縁。元気づけてあげるか。「そう、自暴自棄にならずに。出会いは、きっと、あるわよ。元気、出しなさいよ」学生は、うつむいてしまった。励まされるとますます落ち込んでしまった。「いいんです。ボッチは、慣れてますから。彼女がいなくても、平気です」彼女は、もはや、何と言って励ましていいかわからなくなった。趣味ぐらいはあるのではと思い、趣味を尋ねた。「と言うことは、一人で没頭できる大好きな趣味があるってことね」

8

学生は、首をかしげた。放浪の旅は、趣味といえるのか？ これは、無趣味と同じ。「いいえ、趣味もありません。時間があれば、ゲームをするか、目的のない旅をします。旅というより、放浪ですかね」もう、手の施しようがないと判断したが、旅の話題に乗ることにした。「旅は、素晴らしい趣味よ。目的のない旅って、ロマンチックじゃない。ニヒリストかと思ったけど、意外と、ロマンチストなのね」学生は、笑顔で返事した。「そんな、かっこいいものじゃないです。あてどもなくさまよって、自分の死に場所を探してるんです」死に場所と聞いた彼女は、甲高い声で説得した。「ダメよ、自殺は。生きてることだけでも、親孝行なんだから。死んじゃ、ダメ。いい」

学生は、ハハハ～と小さな声で笑い声をあげた。「冗談ですよ。自殺なんてしません。保険金目当てに、事故を装って自殺すると思ったんですか?僕に、そんな、度胸はありません。心配ご無用。悪い冗談言って、すみませんでした。保険に入るのは、親に迷惑をかけないためです。僕に万が一のことがった場合、保険金で奨学金を返済しようと思ったんです」冗談と言われたことで、ちょっと、気持ちが落ち着いた。もしかしたら、冗談と言ってごまかしているのかもしれない。人を疑えばきりがない。所詮、人の本心を知ることはできない。「冗談で、よかった。私って、心配性なのよ。アップルパイ、とってもおいしかった。保険のセールスに来て、おごらせるなんて、図々しい生保レディね。まあ、ご愛嬌ということで。ご連絡がありましたら、飛んでまいりますので、よろしくお願いします。ごちそうさまでした」

9

死神サークル

10 月 9 日（金）羽多（はた）は、伊藤所長に直帰の連絡を入れると同僚の樋口のマンションに向かった。毎週金曜日、新人の羽多は先輩格にあたる樋口に仕事について相談していた。キッチンテーブルで向かい合った二人は、缶ビールで乾杯した。羽多は、喉を一度鳴らし、今日の奇妙な学生について話し始めた。「先輩、今日、説明を聞きたいと電話をしてきた学生に会ったんですが、かなり陰気な学生でした。定期保険にも入りたいというんですが、交通事故で死んだら、かなりお得ですね、なんて、いうんですよ。趣味を聞いたら、死に場所を探す放浪の旅、なんて言うんです。まいりました」樋口は、小さくうなずき返事した。「セールスやってると、いろんな人にあたるわよ。まだ、学生の戯言なんて、かわいいものじゃない。うまく話を合わせれたの?セールスは、お客を選んじゃダメ。とにかく、一件でも多く、ゲットするのよ」

羽多は、マジな表情で返事した。「はい、とにかく話を合わせて、機嫌を取ってきました。でも、なんだか、自殺願望があるみたいなんです。大丈夫でしょうか?3 年以内の自殺は、保険金が下りないことは説明しましたが、ちょっと、不安なんです。学生だから、医療保険に加入するように勧めたんですが、ぜひ、死亡保険にも入りたいと言うんです。これって、別に、問題ないでしょうか?」樋口は、即座に返事した。「おいしいお客じゃない。よかったじゃない。それじゃ、決めてきたということね」羽多は、顔を振った。「まだです。一週間以内に返事する、って言われました。まずかったですか?」呆れた顔の樋口は、子供を諭すように、返事した。「いつも言ってるでしょ。一瞬のチャンスを逃さな

いようにって。入りたいと言ってるんでしょ。そのタイミングで、決めなくっちゃ。人って、すぐに気持ちが変わるんだから」

肩をすくめた羽多は、叱られた子供のように目じりを下げて小さくうなずいた。「私って、ダメですね。人生相談、受けちゃって、なんだか、かわいそうになって、しかも、アップルパイおごってもらって、帰ってきたんです。生保レディ、失格ですね。あ〜〜、私って、セールスに向いてないのかも」樋口は、クスクス笑い声を漏らした。「ま〜、最初は、そんなものよ。3 年やったら、鬼ババ〜になれるから。石の上にも 3 年、っていうでしょ。とにかく、今は、ノルマを達成すること、いい」羽多は、鬼ババ〜と聞いて、悲鳴を上げた。「え〜〜、鬼ババ〜。いやです。まだ、若いんです。まだ、未婚の乙女なんです。鬼ババ〜なんて、なりたくありません」羽多は、樋口の冷徹な心が理解できず、いつも、樋口の説教に反論していた。

10

樋口は、20 歳で結婚、23 歳で離婚。一生独身を決意した彼女は、24 歳でホステスとなり、27 歳で生命保険会社に転職。生保レディー歴 8 年になる優績者だった。関東地区では、常に上位ベスト 10 にランクインしていた。彼女は、J 医科大学付属病院の内科医と愛人関係にあり、彼の紹介を通じて、全国の医者から大口契約を取っていた。「そうね、羽多は、セールスに向いてないかもね。人には、向き不向きがあるから、早めにやめるといいわ」あっさりと無能を指摘されるとあまのじゃくの羽多は、ムキになった。「先輩、そう、冷たいこと言わないでください。これでも、頑張っているんです。優績者になれなくても、多少は、一前になりたいんです。見捨てないでください。頑張りますから」

樋口は、立ち上がるとフリッジからスイーツを運んできた。「どうぞ。スイートポテトシフォンケーキ、今日は、スイーツ三昧ね」羽多は目を輝かせて、手を合わせた。「今日は、気味が悪いくらい、ラッキー。学生にアップルパイおごってもらって、先輩からは、シフォンケーキ。ア〜〜、生きててよかった。いただきま〜〜す」樋口は、話を続けた。「そう、ムキになることもないのよ。仕事は人生の 1 ページなんだから。仕事ばかりに気をとらわれると、自分を見失うこともある。羽多は、まだ若いし、これからの人生を楽しむことよ。結婚して、家族を愛して、また、自分に向いた仕事が見つかれば、そこで、チャレンジすればいい。とにかく、人生を楽しむことね」羽多は、口をモグモグさせながらうなずいた。

紅茶を一口すすり返事した。「そうですよね、人生を楽しめばいいんですよね。今日の学生ったら、人生はつまんない、って愚痴ばかり。男性って、人生を悲観してるんですかね～。まったく、陰気な学生なんです。内定、取り消されたらどうしよう。死んだら、保険金で奨学金を返済したい。ブサイクで、モテない。結婚は諦めている。夢なんかありません。一生、借金返済のためにロボットのように働くだけです。そんなこというんですよ。まったく、うつ病のひきこもりみたいなんです。どうして、プラス思考ができないんですかね。あんなんじゃ、モテないわよ。まったく」樋口が首をかしげて返事した。「悲観的になるとすべてが悪い方向に傾いてしまう。でも、学生の気持ちもわかるような気がする。経営悪化で倒産、リストラ、新卒採用の中止、こんな時期に出くわした学生は、最悪ね。ほんと、かわいそう」

11

羽多は目を吊り上げた。「そうです。コロナ禍が、すべて悪いんです。私だって、コロナ禍がなければ、クビにならなかったのに。いつまで続くんですかね～、コロナパンデミック。自殺も増えてますよね。そう、先月、先輩が取り扱った死亡保険金、自殺だったんでしょ」樋口は、うなずいた。「既契約者が多いから、死亡保険金の取り扱いも多いわよ。でも、今年に入って、自殺での保険金請求が 3 件。倒産寸前の会社経営者。リストラされた働き盛りの 40 代男性。バクチに狂った鬼畜。みんな、借金が原因じゃないかしら。コロナ不況のせいね」羽多は応答した。「こんな不況じゃ、バイトもできないじゃないですか。4 月以降、授業料も、家賃も、払えず、退学する学生が増えているそうです。授業料支払いと奨学金返済のために、切羽詰まって、風俗で働いている学生もいるそうですよ」

樋口は、自分の人生を不幸な人生と思っていたが、コロナ禍で苦しんでいる若者や自殺者を目の当たりにすると自分の不幸をそれほど不幸とは感じなくなっていた。樋口の離婚原因は、自分の不妊症にあった。そのことは、心の大きな傷となり、今も癒されることはなかった。一生独身を決意してからは、知的障がい者の妹の老後の面倒を見るために収入の大半を貯蓄をしている。「人には、それぞれ事情があって、必死に生きてるのよ。不況で、リストラの嵐。どこも、経営悪化で倒産に瀕してるのよ。贅沢言えるような

ご時世じゃないのよ。一度は、羽多も風俗を考えたんじゃない?」顔をしかめた羽多は、うなずいた。「そうなんです。ハローワークで数十社、問い合わせをやったんです。でも、全くダメでした。どこも、採用一人とか、すでに決定したとか。営業なんて、やったことないし、向いてないとは思ったんですけど、やむなく、生保レディに」

樋口は、愛人を利用しての仕事に納得しているわけではなかった。でも、コロナ不況で生きていくためには、やむを得ない手段と自分に言い聞かせていた。横浜支社にも、枕営業で成績を上げているという噂の生保レディが何人もいる。でも、彼女たちを非難できるだろうか?みんな、必死になって、生きているにすぎない。「ここだけの話だけど。風俗も不況らしいのよ。それで、逆に、うちの支社でも、元風俗嬢らしき風貌の女性が、結構、面接にやってくるんだって。面接をすれば、すぐにわかるって、所長が言ってた。それがさ、入社して、瞬く間に、優績者になるんだって。要は、エグイ手口を使ってるってことよ。わかるでしょ」羽多は、ハ〜とため息をついてうなずいた。生きるためには手段を選ばないということか。生保レディが、どんな方法で契約を取っているかは、だれもわからない。

12

羽多は、枕営業までして、成績を上げたいとは思わなかった。会社は、成績でしか人を評価しない。優績者は、周りからうらやましがられ、本社に招待されて、表彰される。でも、どんな方法で成績を上げているかは、一切問われない。「私は、マイウェイです。生保レディで失敗しても、それもスキルアップの糧になると思います。これからも、先輩のやり方を参考に頑張ります。今後とも、ご指導、お願いいたします」樋口は、一瞬、顔が引きつった。まさか、愛人の人脈を使って、契約を取っているとは、口が裂けても言えなかった。「私なんか、参考にならないわよ。とにかく、必死になって、お客にあたること、それだけ。思いは、必ず、通じるから。肝に銘ずることは、情に流されないこと。これが、ムズイのよね〜〜」

羽多は、神妙な表情を作るとこれからのことを話し始めた。「私なんか、セールスのひよっこです。セールスのイロハもわかりません。もっと、もっと、先輩のご指導を仰がなければと思います。ところで、私事で恐縮なんですが、今回のリストラで自分の人生を考えてみたんです。そして、何が、自分にとってベストなのか考えてみました。都会でバリバリ仕事をやって、イケメン男性と結婚することが、幸せなのか?親は、田舎の大学

を勧めましたが、親に無理を言って、東京の大学に行かせてもらいました。また、幸運にも、H 旅行会社に就職できました。でも、リストラされてしまえば、学歴も、前職も、評価されませんでした。このまま、都会にいることに、疑問がわいてきたんです」樋口の表情が暗くなった。小さくうなずき尋ねた。「それじゃ、田舎に帰るということね。田舎は、福岡だったわね」

羽多は、さみしそうに話し始めた。「はい、今となっては、田舎でもいいかなって。都会にいる価値が見いだせないんです。生保レディをやるんだったら、福岡でもできるし。福岡だったら、もっと、自分に向いた仕事が見つかるようにも思えるし」樋口は尋ねた。「そのことは、所長にも話したの?」羽多は、小さくうなずいた。「はっきりしたことは、まだなんです。福岡支社に転属できるか、確認してもらっているところです」樋口の細い目が光った。「そう。でも、仲間が福岡にいるというのも、いいかも。全国に、お客はいるんだし。そうね、これって、いいかも。そうよ、田舎に帰りなさい」

13

羽多は、仲間とはどういう意味かピンとこなかった。確かに、お互い生保レディ仲間であることには違いなかったが、福岡支社に行ってしまえば、仕事上で交流することはないと思えた。「先輩とは、どこに行っても、仲間って、ことですね。福岡支社に行っても、ご指導いただけるってことですね」樋口は、何か考えているような表情でしばらく黙っていた。突然、鋭い目つきをすると静かに話し始めた。「仲間って、言ったでしょ。でも、この仲間というのは、生保レディの仲間じゃないの。困った女性を救済する仲間なの。やってもらいたいことは、簡単なことなんだけど。どう、やってみる覚悟はある?」いったい、何を言っているのかさっぱりわからなかった。羽多は、尋ねた。「女性を救済する仕事、ってどんな仕事ですか?具体的に言っていただけないと返事できません」

樋口は、ニコッと笑顔を作った。「そうね、ちょっと説明しにくいんだけど。情報屋、ってことかな。セールスに行くじゃない。奥様と親しくなると悩み相談を受けることがあるでしょ。特に、ご亭主の。羽多は、まだ、未婚だから、夫婦のことはわかんないと思う

けど、酒乱で奥さんに暴力をふるったり、バクチで借金作って、借金返済のために奥さんを風俗で働かせたり、そんな、どうしようもない鬼畜亭主、っているのよ。奥さんは、別れたいけれど、別れようとしないご亭主もいるのね。つまり、このような夫婦がいたら、私に教えてほしいってこと。当然、報酬は、支払うわ」羽多は、今一つピンとこなかったが、簡単な仕事のように思えた。「要は、セールスに行って、夫婦仲が極悪の奥さんに出くわしたとき、その情報を樋口さんに教えればいいということですか?」

樋口は、ニコッとうなずいた。「そういうこと。簡単でしょ」羽多は、首をかしげて尋ねた。「先ほど仲間って言われましたけど、ほかにも、このような情報屋をやってる生保レディがいるってことですか？」樋口は、即座に返事した。「さすが、頭の回転が速いわね。察しの通り、赤羽支社、浦和支社、船橋支社、大坂支社、京都支社にも仲間がいるの。何も心配はしなくていいのよ。情報だけでいいのよ。あとは、私が、人助けするから」人助け、ということは、身の上相談に乗ってあげて、夫婦円満になるアドバイスでもするのだろうか?「樋口さんが、身の上相談に乗ってあげるということですよね。これって、素晴らしい人助けです。わかりました。でも、福岡支社に行くってことは、福岡のお客さんの情報ということになります。それでも、いいのですか?福岡までやってきて、身の上相談をなされるのですか?」

14

樋口は、大きくうなずいた。「もちろんよ。人助けなんだから、全国どこにでも、飛んでいくわ。やってくれる？」羽多は、ちょっと首をかしげたが、引き受けることにした。「は〜〜、そんなことぐらいだったら、できると思います。あくまでも、どうしようもない鬼畜のようなご亭主がいる夫婦の情報ですよね。そんな夫婦って、あまりいないと思いますけど。もしも、いたらでいいんですよね」樋口は、笑顔で返事した。「もちろんよ。この世から消えてほしいような鬼畜亭主がいたらでいいのよ。意外と、いるのよね。東京には、腐るほどいるわよ。きっと、福岡にもいるから、情報お願いね」

羽多は、軽く引き受けてみたものの、今一つ納得できなかった。確かに、相談に乗ってあげることは、精神的な救いになるような気がしたが、話を聞いてあげて、アドバイスしたぐらいで、ご主人の生活態度や、暴力をふるう性格は治らないように思えた。実

際に、本当に困り果てた奥さんの手助けになった実績はあるのだろうか?「人助けは、いいことだと思います。でも、奥さんでも、どうにもならない鬼畜のようなご主人なんでしょ。そんな家庭問題を、樋口さんのアドバイスで解決できるものでしょうか?ちょっと、信じがたいんですけど」樋口は、ニコッと笑顔を作り、返事した。「そうよね。奥さんの説得でも、弁護士のアドバイスでも、解決できない家庭問題を、私が解決できるのか、って言いたいのね。誰しも、そう思うわよね。でも、私は、何人もの奥さんたちから、感謝されてるの」

羽多は、具体的には理解できなかったが、深く詮索する気になれなかった。情報提供をすることが、人助けになり、しかも、先輩のためになれば、御世話になった恩返しができる。「先輩の恩返しになるんだったら、やれるだけのことはやります。先輩って、人格者なんですね。恐れ入りました。私なんか、まだまだ、子供ですね」樋口は、ハハハ、と笑い声をあげた。「人格者じゃないわよ。この世から消えてほしい鬼畜を地獄に案内する偽善者なんだから。男にとっては、死神ね」地獄に案内する偽善者?要は、何らかのヤバイ方法で、離婚させるということか?弁護士でも離婚させることができない夫婦を離婚させることが、本当に、できるのか?「あの手、この手、を使って、離婚させるってことですね」

15

樋口は、大きくうなずいた。「その通り。必殺技で、離婚させるの。弁護士や、裁判では、らちがあかないんだから。そこで、私の出番、っていうわけ」必殺技とは、いったい、どんな方法なのか？ 羽多には、全く見当がつかなかった。「私のような凡人には、よくわかりません。でも、先輩の器量だったら、できるんですね。ますます、先輩が、女神様のように見えてきました」女神といわれ、樋口は、噴き出してしまった。「女神じゃないわよ、死神よ。私は、鬼畜の藁人形を作って、その藁人形に5寸くぎを打ち込むの。そうすると、なぜか、突然、ガンになって、抗がん剤の効もなく頓死してくれるの。早い話、離婚させるというより、死別させる、ってわけ。今年に入って、3人の鬼畜が、ガンで地獄に行ったのよ。奥さんたちに、涙を流して、感謝されたわ」

冗談と思った羽多は、笑顔でうなずいた。「藁人形ですか。呪術で鬼畜を地獄へ道案内。鬼畜がこの世から消えて、奥さんは、涙を流して、大喜び。さらに、多額の保険金が入るというわけですか。全く、これって、ブラックユーモアですね。こんな話を聞いていると結婚が怖くなりました。万が一、鬼畜と結婚したなら、先輩の呪術で地獄に案内してください。その時は、よろしく」樋口は、おなかを抱えて笑い出した。「羽多こそ、ブラックじゃない。羽多は、大丈夫よ。きっと、素敵な紳士と結婚できるわよ。結婚式には、招待してね」羽多も冗談が過ぎたと思い、苦笑いした。「もちろんです。ぜひ、結婚式にはいらしてください。2 年以内には、福岡で、いい人見つけますから。待っていてください」樋口は、笑顔で返事した。「それじゃ、死神サークルの仲間入りを祝って、改めて乾杯しましょう」

樋口は、ワイングラスと赤ワインを運んできた。「鬼畜がこの世から一匹でもいなくなりますように、それと、羽多に素敵な彼氏ができますように。ア〜〜メン。カンパ〜〜イ！」二人は、グラスを響かせるとグイッと喉を鳴らした。樋口は、グラスをテーブルにそっと置くとスッと席を立ち、奥の寝室に向かった。そして、ピンクのポーチを右手に取って戻ってきた。笑顔で席につくとポーチのファスナーを開いき、右手を差し込んだ。羽多は、引き出された右手を見て目を丸くした。右手には、札束が握られていた。「はい。私からのお餞別。活動費の足しにしてちょうだい。足りないときは、いつでも言って。でも、情報提供の約束は、忘れないでね」100 万円の札束が、羽多の目の前に差し出された。羽多は、固まってしまった。「こんな大金、受け取れません。お金のことは、心配なさらないでください。活動費には、困っていませんから」

16

樋口は、笑顔で返事した。「そんな、やせ我慢しなくていいのよ。リストラにあって、貯金もないことぐらいわかってんだから。遠慮はいらないのよ。さあ、受け取って。情報提供報酬の前払いと考えてもらってもいいわ。とにかく、羽多とは、契りを交わした仲間なんだから。さあ、遠慮しないで。自慢じゃないけど、羽多よりは、はるかに金持ちなんだから」羽多は、じっと、目の前の札束を見つめた。喉から手が出るほどお金が欲しかった。貯金は、底をつき、来月のマンションの家賃が、支払えそうになかった。来月からは、家賃の安いコーポに引っ越す予定だった。でも、防犯設備のいいマンション

を出たくない気持ちは、強かった。受け取るべきか迷ったが、ハッと気づいたときには、右手が、札束を握りしめていた。「本当に、いただいてもいいんですか？」

樋口は、笑顔でうなずいた。「羽多には、期待してるの。福岡支社に転属になっても、情報、頼むわね」羽多は、札束に手を合わせて、お辞儀をした。「先輩の期待にこたえられるかどうか、自信はありません。でも、先輩のご厚意をありがたく頂戴いたします。実を言うと、貯金も底をついていたんです。だから、福岡に帰るしかなかったんです。福岡支社に転属しても、全力を尽くします。先輩は、女神様です」羽多の目から涙がこぼれた。樋口は、即座に声をかけた。「何、泣いてるのよ。今日は、契りの祝賀会じゃない。力を合わせて、鬼畜をこの世から、消し去るのよ。頑張りましょう」顔を持ち上げた羽多は、涙声で返事した。「はい。一生、先輩についていきます。今後ともよろしくお願いします」

17

ドクターX

10 月 12 日（月）樋口の午前中の予定は、横浜柿の木台郵便局近くの市毛宅訪問。10 時 30 分、横浜支社を出立した樋口は、タクシーで市毛宅に向かった。リビングで約束の 11 時を気にしていた市毛は、二度のピンポ～ン、ピンポ～ンと鳴るインターホンの音に

跳びあがり、玄関にかけていった。樋口の顔を見るなり、市毛は、感謝の気持ちを込めて、深々と頭を下げた。「どうぞ、おあがりください」リビングに通された樋口は、静かにソファーに腰掛けた。市毛は、紅茶を運んでくると右斜め前に腰掛けた。少し紅潮した顔の市毛は、ゆっくり頭を下げて、お礼を言った。「何と言って、お礼を言えばいいか。本当に、ありがとうございました」市毛は、ハンカチで目頭を押さえた。

樋口は、平然とした表情で話を切り出した。「早速ですが、お約束のものを」市毛は、軽く会釈すると小走りに寝室にかけていき、バラの花柄模様の手提げ袋を抱えて戻ってきた。「どうぞ、お確かめください」袋の中には、100 万円の札束が、18 個入っていた。樋口は、確認するとうなずいた。死亡保険金は、3000 万。市毛が 4 割。ドクター X が 3 割。樋口が 3 割。この配分が、約束されていた。市毛は、改めてお礼を言った。「この度は、本当にありがとうございました。安易に再婚したばかりに、娘を傷つけてしまい、悔やんでも、悔やみきれません。樋口さんに、お会いすることがなかったら、私は主人を殺し、自殺していたことでしょう。でも、これで・・」静かなリビングに嗚咽が響いた。「本当によかったですね。これが、ご主人の運命だったのでしょう。わたくしは、奥様と娘さんのお気持ちを神にお伝えしただけです。神は、奥様と娘さんをお守りになられたのです。改めて、神に感謝いたしましょう。ア〜〜メン」二人は、胸の前て十字を切り、手を合わせた。

市毛は、席を立つと焼き栗モンブランを運んできた。「どうぞ」樋口は、約束を守るように念を押した。「今回のガン入院のことは、わかりましたね」市毛は、小さくうなずいた。「発見が遅れたために、最善を尽くしても、ダメだった、ということですね」樋口は、ゆっくりうなずいた。「それ以外のことは、一切、話さないでください。いいですね。主治医から正式な死亡診断書が提出されている限り、全く、問題はありません。安心してください」市毛は、うつむいてうなずいた。樋口は、慰めの言葉をかけた。「娘さんの心の傷が、少しでも癒されることを祈っています。今後は、奥さんも安心して、眠られますね。本当によかった。神のご守護で、お二人が、地獄から抜け出し、代わりに、鬼畜が地獄に落ちたのです。わたくしは、これからも神のご神示の下、人助けを行ってまいります」

18

午後 7 時少し回ったころに、樋口宅にドクター X が人目をはばかるようにやってきた。テーブルに腰掛けると口火を切った。「もらおうか」樋口は、900 万が入った袋をドクターに差し出した。中を確認したドクター X は、一つうなずき、大きなため息を漏ら

した。「どうにか、うまくいった。人助けもつかれるな」樋口は、ゆっくりと頭を下げた。「神を信じてくださる先生のおかげです。鬼畜は、尽きることはございません。これからも、先生のお力をお貸しください」ドクターXは、ドヤ顔で返事した。「まあ、俺を疑うやつはいない。世界的名医だからな。問題は、依頼者だ。裏切ることはないだろうな」樋口は、マジな顔つきで返事した。「その点は、私にお任せください。決して、先生にご迷惑がかかるような不始末は致しません。ご安心ください」

ドクターXを見送り一息ついているとアイフォンの着メロが鳴った。即座に、樋口は、応答した。「どうしたの?」羽多は、明るい声で返事した。「夜分、すみません。嬉しくて、福岡支社への転属、OKが出ました」樋口は、転属日を確認した。「よかったわね。いつから?」羽多は、即座に返事した。「12月1日付けです。本当に、先輩には、お世話になりました」樋口は、今後の予定について話を聞きたかったが、明日、直接会って聞くことにした。「それじゃ、今後のことは、明日、ここで聞くわ。いつもの時間ね」樋口は、電話を切るとなんだか、さみしさが込み上げてきた。羽多が、いなくなると思うと羽多との出会いが脳裏を駆け巡り眠れそうになかった。良くない習慣と思ったが、赤ワインで眠気を誘うことにした。

10月13日（火）羽多は、桜木駅南口を出ると野毛にある樋口のマンションに速足で向かった。午後7時過ぎに、樋口のマンションに到着した。息を整えてドアを開くと祝福の言葉で歓迎された。「よかったじゃない。今日は、門出の祝いね。パ〜〜と行きましょう」キッチンテーブルには、豪華なオードブルと特上お寿司が並べられていた。羽多が、テーブルに着くと樋口は赤ワインを注いだ。グラスを手にした樋口は、乾杯の音頭を取った。「さあ、乾杯。二人の幸福と女性たちの未来に、カンパ〜〜イ！」早速、羽多は今後の予定を話し始めた。「11月下旬には、福岡の実家に帰ります。しばらくの間、会社へは実家から通うつもりです」樋口は、笑顔で応答した。「博多ドンタクに一度行ったことがあるんだけど、時々、遊びに行くわね。旅先が一つ増えて、うれしいわ」

19

羽多は、生ハムを飲み込むと応答した。「ぜひ、遊びにいらしてください。これと言っ

て観光名所はありませんが、あちこち案内します。福岡も、捨てたものじゃありませんよ」樋口は、ワインを一口飲むと尋ねた。「羽多の家って、どのあたり？」羽多は、スマホの地図を開き、福岡市を拡大した。「このあたりです。西区愛宕浜のイオン北側の、この住宅街の～ここ、です。ここが、母校のＳ高校。ここから北に向かって、都市高速沿いのここが、ペイペイドーム。福岡支社は、博多駅前だから～、ここです」嬉しそうに話す羽多に応答した。「タイミングよく転属できてよかったじゃない。でも、ムリしてセールスを続けなくてもいいのよ。気に入った仕事があれば、転職していいんだから。お金のことで、義理立てしないでね」

困窮しているときに救いの手を差し伸べてくれた厚意は、決して忘れることはできなかった。コロナ禍の不況下では、事務職への転職はかなり厳しい。確かに、厳しいノルマのある生保レディは、長くは続かないかもしれない。でも、生保レディで、人助けのお手伝いはできる。「お金のことは、本当に感謝しています。今は、この仕事を全力でやってみます。何か、得るものがあると思います。それに、人助けのお手伝いができると思えば、やる気が出ます」樋口は、お客に感謝されたことを話すことにした。「そう思ってくれると嬉しいわ。昨日、保険金を受け取られたお客さんから電話があって、お宅に伺ったの。このご恩は、一生忘れません、と感謝されたわ。こういわれると、人助けを続けなくてはと改めて思ったわ。羽多さん、一緒に頑張りましょう」

一生忘れません、といわれるほどの人助けについて、具体的に知りたくなった。「そのご亭主は、ガンで亡くなられたんでしょ。これって、運命ですよね。それとも、先輩の呪術で、長生きする運命を、早死にする運命に変えたんですか?」目を丸くして応答した。「あら、ご名答。でも、鬼畜は、呪術だけじゃ、地獄に行かないのよ。だから、ちょっとしたマジックを使たの。このマジックのおかげで、奥さんのご亭主殺害を防ぐことができたの。ホッとしたわ」マジックと聞いて種明かしをしてほしくなった。「どんなマジックですか?種明かし、してくださいよ。聞きたいな～～」樋口は、右手の人差し指を唇に当てた。そして、つぶやいた。「内緒。このマジックは、刑事でも、検事でも、名探偵でも、解明できないマジック。このマジックは、墓場まで持っていくの。悪く思わないでね」

20

マジックの種明かしを聞き出すことができなくて顔をしかめたが、ポンと手をたたいて笑顔を作った。「この前の金曜日、陰気な学生の話をしたじゃないですか。その学生から電話があったんです。医療保険と定期保険に入りたいそうです。ちょっと、気味が悪いですが、今度は、決めてきます」樋口は、顔を引き締めて激励した。「その意気。生保レディは、成績で評価されるの。やれば、できるから。頑張って」目を吊り上げ腕組みをした羽多は、大きくうなずき、応答した。「はい。乙女ぶるのはやめます。今後は、先輩を見習って、鬼ババ～になり切ります。よし、優績者になってやる。今に見てろ」頼もしい発言にうなずいたが、未婚の女性に鬼ババ～は、似つかわしくなかった。「張り切るのはいいけど、鬼ババ～は、私だけで結構。羽多は、自分の良心を信じて、お客に誠意を見せればいいのよ。神様は、きっと、見守ってくれるから」

樋口の不気味なやさしさは、どこからきているのか？ 過去になにか大きな心の傷を負ったことによるものか?羽多は、考えようとしたが、清楚な美しさを持つ顔からは、過去のどす黒い陰などみじんも感じられなかった。なぜ、これほどまでに鬼畜を憎み、苦しむ女性を救済しようとするのか?もし、何か得体のしれない信仰心によるものであれば、宗教に無縁の羽多にとっては、異次元の心理でしかなかった。これ以上樋口のやさしさを疑うのは、無宗教からくる背徳のように感じられた。生保レディをやったために、猜疑心が強くなってしまったのかもしれない。やさしさを素直に感じ取るべきではないか。羽多は、樋口のやさしさを素直に受け入れることにした。

残り、2ヶ月弱の樋口との付き合いを楽しもう。また、福岡支社に転属するまでは、横浜支社で精一杯頑張ろうと決心した。ふと、時刻を確認すると、8時を回っていた。帰宅の挨拶をしようと声を発しようとしたその時、樋口の着メロが鳴った。「はい、了解」樋口が返答すると羽多に確認した。「仲間を紹介したいんだけど、まだ、いいでしょ」仲間と聞いて興味がわいた。「はい、ぜひ」樋口が返答した。「もう、10分もすれば着くそうよ。仲間といっても、生保レディじゃないの。彼女は、中学校の同級生で、弁護士。だから、情報の宝庫ってところ」羽多が、これからやってくる仲間のことを想像していると、トン、ト、トン、モールス信号のような小さなノックが響てきた。彼女は、即座にドアを開け、キッチンにやってきた。

彼女は、テーブルを見て、甲高い声を上げた。「あら、ご馳走じゃない。今日は、何事?」樋口が、彼女に話しかけた。「こちらは、仲間の羽多。同じ生保レディ」彼女は、樋口の左横に腰掛けると自己紹介した。「初めまして、那鳥（なとり）です。弁護士やってます」羽多も自己紹介した。「羽多と申します。樋口先輩には、お世話になってます。よろしくお願いします」樋口は、那鳥の人助けについて話し始めた。「那鳥は、困った女性のために、ただ同然の報酬で働いてるのよ。まあ、こんなお人好しの弁護士がいてもいいかもね」那鳥が、ワインを空けると応答した。「金持ちからは、正規の報酬をもらってるから、どうにかやっていけてるけどね。本当にお金に困って、苦しんでいる女性は多いのよ。彼女たちを、誰かが救わなくっちゃいけないのよ。その、損する役を買って出てるってわけ。好きで、やってるから、いいのよ」

樋口といい、那鳥といい、尋常ではない。確かに、人助けはいいけど、自分を犠牲にしてまで、やるべきことではない。羽多は、自己犠牲を否定したが、二人の考えを批判する気にはならなかった。「樋口さんも、那鳥さんも、神様ですね。私には、到底そのような人助けはできません」那鳥が、樋口のやってることを皮肉を込めてつぶやいた。「そう、感心しなくてもいいのよ。樋口は、偽善者なんだから。ガッツリ、保険金の報酬を手にしてるんだから。わかるでしょ。鬼畜が死ねば、大金が入るんだから。綱渡りのようだけど、割のいい商売よ」樋口が口をとがらせて応答した。「人聞きの悪い。人助けの報酬じゃない。悪徳商売じゃないわよ。那鳥にも、それ相応の報酬をやってるじゃない。そんないい方したら、羽多が誤解するわよ」

羽多は、即座に応答した。「いえ、お二人がやられていることは、素晴らしいことだと思います。人助けして、それ相応の報酬を得るのは、当然です。決して、悪いことではないと思います。私も、お手伝いさせてください」那鳥は、物わかりのいい応答に感心した。大きくうなずいて返事した。「あら、わかってるじゃない。人助けにも、お金がかかるのよ。私みたいなお人好しは、樋口のおかげで、助かってるのよ。軍資金は、樋口に任せて、羽多さん、力を合わせて、頑張りましょう。今日は、愉快な日だわ。パ〜〜とやりましょう」お寿司を口に放り込む那鳥に、樋口は、このご馳走を説明した。「このご馳走は、羽多の転属祝いなのよ。あんたが、パクパク食ってどうすんの。羽多、遠慮せずに、食べなさい」

22

目を丸くした那鳥は、あっけに取られて、口を止めた。「そうだったの。そうだったら、それって言ってちょうだいよ。転属って、どちらへ?」羽多は、即座に返事した。「福岡支社です。12 月から、福岡支社勤務です。それで、樋口先輩が、祝賀会を開いてくださったんです。福岡に行っても、人助けのお手伝いは、続けたいと思います。どの程度できるか、自信はないんですが、できる限り飛び込みをして、情報収集します。うまく、奥さんから、悩みを聞き出せればいいのですが」那鳥が、アドバイスした。「悩みというのは、他人には、話したくないものなのよ。でも、ご亭主の話を避ける口ぶりを感じたら、何か、ご亭主の悩みがあるとみていい。世間話やら、家族の話をしながら、相手のガードを緩めていくの。焦っちゃダメ。根気良く、相手の気持ちに寄り添ってあげるの。そうしてるうちに、徐々に、閉ざしていた心を開くから」

羽多は、マジな顔つきで大きくうなずいた。「そうですか。とても参考になります。私って、せっかちで、つい、単刀直入の質問をやっちゃうんです。これからは、焦らず、情報収集します」羽多の素直で理知的な一面を知り、那鳥は、安心したが、仲間になるうえでの掟を確認した。「私たちの仲間になれる素養はあるわね。でも、最も重要なことがあるの。口が堅いこと。つまり、人助けになる情報交換は、構わないんだけど、仲間内のことについては、だれにも話さないこと。仲間の情報とか、仲間内で話し合った内容とか。守ってくれるわね」羽多は、ちょっと堅苦しい仲間のように思えたが、仲間のことを他人に話す気はない。素直に返事した。「はい。私の役目は、ご亭主に悩んでいる奥さんの情報を提供すればいいのですね。それだけでいいんですね」

樋口が口をはさんだ。「そうよ。羽多は、悩みを持った奥さんの情報を持って来てくれたらそれでいいの。あまり、重く考えないで。私たちは、人助けの仲間なんだから。ほら、那鳥は、弁護士でしょ。世間体を気にするのよ。そう、気にしないでいいから」羽多は、別に気にしていなかった。詐欺仲間じゃあるまいし、胸を張って人助けの手伝いをやりたかった。「はい。私は、まだ未婚なので、わからないことが多いと思います。今後とも、ご指導よろしくお願いします」那鳥は、羽多の素直な性格に安心した。「福岡にも仲間ができたのね。そうだ、来月、3 人で、一泊二日の親睦旅行ってのはどう。羽多、計画してよ」羽多は、旅行好きで、学生時代から、全国の温泉を旅行していた。「いいですね。旅行、大好きなんです。一泊二日ですね。任せてください」樋口と那鳥は、頼もしい仲間ができたと笑顔を作った。

23

失踪と病死

10 月 5 日（月）博多署に、菅原洋次の家出人捜索願い届がなされた。その内容には、不可解な点があった。博多区在住の菅原洋次は、横浜市に本社のある三ツ星運輸の長距離トラック運転手であったが、6 月 30 日（火）付けで退職。7 月 1 日（水）、菅原洋次は、妻、美津子に退職金が振り込まれる預金通帳を手渡し、職探しを兼ねて、しばらく旅に出る、時期に戻るから心配しないように、と言い残し姿を消した。ところが、それ以後、全く電話連絡もなく、音信が途絶えた。事故にでもあったのではないかと不安になった美津子は、博多署に駆け込んだ。警察は、全国の事故情報からは、菅原洋次と思われる人物を確認できなかった。考えられることは、菅原洋次は、まだ帰宅する意思がなく、旅を続けている。もしくは、何らかの事件に巻き込まれ、帰宅ができない状況に置かれている。女を作って逃げたとは思いたくなかった美津子は、何らかの事件に巻き込まれたに違いないと警察に訴えた。

菅原洋次は、横浜本社の市毛武史という同僚とコンビを組み、トラックで全国を飛び回っていた。二人は、いつも一緒で、東日本の配送依頼を受けた場合、横浜の市毛宅に宿泊し、西日本配送依頼を受けた場合、福岡の菅原宅に宿泊していた。そこで、10 月 2 日（金）美津子は、元勤務先の三ツ星運輸を通して横浜在住の市毛武史に連絡を取ることにしたが、9 月 29 日（火）付で、病死していたことを知った。所在確認の手掛かりを失った美津子は、警察に駆け込んだのだった。博多署では、事件性がないと判断し、単なる家出として処理した。だが、美津子は、単なる家出のはずがない。きっと、何かの事件に巻き込まれたに違いないと訴えた。そこで、警察は、何らかの情報を得るために横浜在住の市毛武史の妻、市毛真由美に菅原洋次について尋ねることにした。

事件性が薄いため、市毛真由美への事情聴取を神奈川県警に依頼することができず、福岡県警本部長の懐刀、沢富と子守役の伊達を横浜に出向させることにした。二人は、コロナ禍のため対馬での麻薬捜査は中断され、博多署に呼び戻されていた。10 月 20 日（火）二人は、市毛武史の妻、市毛真由美、三ツ星運輸の総務課長、鈴木紀夫、並びに警察庁局長との面談を行うために、福岡空港を飛び立った。二人は、その日の午後 2 時の市毛宅訪問予約を取っていた。午後 12 時 35 分に羽田空港に到着した二人は、空港内のレストランで軽く食事をとって、タクシーで市毛宅に向かった。約束時刻の 20 分前に、青葉区柿の木台に到着した二人は、近隣を散策しながら、面談の打ち合わせをやること

にした。

24

菅原洋次失踪の件には、事件性はない。単なる家出の可能性が高い。よくある女を作っての失踪だ。女と別れて元の鞘に収まる場合もあるが、全く行方がわからなくなり、7年以上の失踪となる場合がある。失踪が、7年経つと失踪宣告で死亡扱いできるが、それまで、配偶者は再婚ができず、消えてしまった夫を待ち続けることになる。配偶者にとっては、この上ない悲劇だ。菅原洋次の場合も家出の可能性は高いが、全く、事件性がないと言い切ることはできない。すでに、市毛武史は死亡しており、菅原洋次に関する情報を市毛真由美から得るのは困難と考えられる。おそらく、市毛真由美は、夫の仕事については詳しくないはず。ならば、夫の相棒である菅原洋次についても知らないはず。果たして、市毛真由美との面談に意味があるのか?

一縷の望みは、菅原洋次宛てへの伝言を死亡した市川武史が真由美に残していること。些細なことでも、捜索の手掛かりにはなる。死の間際に、何か言い残していないか？ 伊達は、考えれば、考えるほど、心細くなり、横浜への出張が、無駄骨のように感じられた。伊達は、キョロキョロとあたりを見渡していた無言の沢富に声をかけた。「おい。なんだか、いやな予感がしね～か。市毛武史は、死んでるんだぜ。まいったな～～」沢富も無駄足と考えていた。「普通、妻は、亭主の仕事関係のことは、知りませんよ。しかも、菅原洋次は、市毛武史と同じく6月末に会社を辞めて、その翌日から失踪しています。期待薄ですね」

伊達は、大きくうなずいた。「6月30日付で、二人の退職が受理されている。また、市毛武史の入院も、菅原洋次の失踪も、7月からだ。これは、明らかに計画的といえる。同時退職には、二人に共通した隠された秘密がるようにも思える。でもな～、市毛武史は、この世にいないし。とにかく、妻の真由美が頼みの綱ってことだ」伊達は、腕時計を覗き、約束時刻に間に合うよう足を速めた。市毛宅の玄関前で息を整え、インターホンを二度押した。中から、か細いが、澄んだきれいな声の返事があった。「どうぞ、お入りください」伊達が、扉を開くとネイビーのレーススリーブロングドレスをまとった華奢な女性が両手を前にそろえて立っていた。二人は、リビングに案内され、ソファーに腰掛けた。お茶の準備にとりかかった真由美に伊達は声をかけた。「何もお構いなく。ちょっと、ご主人の同僚だった菅原洋次さんについて、お聞きしたいだけですから」

25

真由美は、お茶を運んでくると二人の前に腰掛けた。「どうぞ、菅原洋次さんについて、お尋ねですね。確かに、関東方面の仕事の時は、よく、私の家にお泊りになられてました。でも、仕事のことで、お話したことはございません。菅原さんも、主人と一緒に退職されたと聞いていますが、主人は、退職して、すぐに入院しました。悪く言うわけじゃありませんが、長年一緒に仕事した同僚が、ガンで入院したんですよ。一度くらい、お見舞いに来てもよさそうに思ったんですが、一度もお見えになられませんでした。お見舞いの電話一本も、ございませんでした。わざわざ、福岡から足を運んでいただいて、恐縮なんですが、今申し上げたこと以上は、何も存じ上げません」

伊達は、菅原洋次の失踪について話すことにした。「実を言いますと、菅原洋次さんは、退職日の翌日、旅に出る、と言って出かけられました。奥さんには、時期に帰るから、と言われたそうですが、もう、3 か月が過ぎました。奥さんは、何か、事件に巻き込まれたのではないかと心配なされて、博多署に捜索を依頼されたのです。今のところ、事件性がないもので、彼の人間関係をたどって、情報を集めている次第です。単なる一時的な家出と考えられなくもないのですが、事件に巻き込まれた可能性もあるわけです。亡くなられたご主人のことを思いださせるようで、心苦しいのですが、何か、ご主人から、菅原洋次さんについて、聞かれたことはございませんか?どんな、些細なことでも構いません」

市毛真由美は、首をかしげ、考えているようなそぶりを見せた。「そういわれましても、菅原さんのプライベートについては、全く存じません。知ってることといえば、主人はバクチ好きで、菅原さんも主人と一緒に、パチンコ、競艇、競馬をやられていたみたいです。知っていることといえば、そのぐらいですかね～。すでにご存じだとは思いますが、主人も菅原さんも、若いころは、チンピラヤクザだったみたいなんです。酔った勢いで、ヤクザ時代の話を楽しそうに話していました。結婚前にそのことを知っていれば、再婚しなかったんですけど。後の祭りでした」ヤクザと聞いた伊達は、今回の失踪に事件性を感じた。「え、ご主人も、菅原洋次さんも、元ヤクザですか。それじゃ、最近まで、

ヤクザと付き合っていたんでしょうか?」

26

真由美は、小さく顔を振った。「そこまでは、わかりません。主人は、お酒が入ると、饒舌になるんですが、普段は、全く話さないんです。お酒が入ると、バクチで負けた愚痴とか、女の話で騒いでいましたが、菅原さんは、主人と違って、おとなしい方で、年下ということもあったのか、主人の機嫌を取っていたようでした。それと、ダサい主人と違って、背も高く、イケメンだし、知性的な顔立ちでした。たまに、粋な格好で遊ばれてました。ラルフローレンのジャケット、ローレックスの腕時計、フェラガモの靴。そう、菅原さんって、博多でしょ。なのに、博多弁をしゃべらないんです。一度、博多弁を聞きたくて、博多弁をしゃべってくださいよ、ってからかったことがあるんです。どうも、福岡出身じゃないみたいですね」

伊達は、心でつぶやいた。元ヤクザだった。福岡出身ではない。知性的。少しづつ、菅原洋次の人間像が具体化してきた。市毛武史の人間関係はどうか?「亡くなられたご主人のことをお聞きするのは、恐縮なんですが、ご入院中に、どのような方が、お見舞いにいらしたか、お聞かせ願いますか?」真由美は、即座に答えた。「お見舞いにですか。いらした方は、三ツ星運輸の総務課長をなされている鈴木さんだけです。主人から、入院していることを誰にも言わないように、って口止めされました」伊達は、腕を組んでうなずいた。「総務課長の鈴木さんですか。菅原さん宅にも、鈴木課長が来られたそうです。旅先に心当たりはないか、思いつくところを言ってください、としつこく聞かれたそうです」

目を丸くした真由美は、病院での出来事を話すことにした。「主人は、入院直後から、面会謝絶になり、手術が行われました。手術後、しばらくして、鈴木課長さんは、ぜひ、話をさせてほしい、と主治医に訴えていたみたいでしたが、絶対安静と言われ、面会を謝絶されました。当然、私も面会謝絶になりました」首をかしげた沢富は、尋ねた。「ガンでの入院ですよね。面会謝絶というのは、ふにおちませんね〜。手術をして、1か月もす

れば、面会できるはずですが。かなり、重篤の状態だったんですか?」真由美も、ちょっと首を傾げて、返事した。「私も心配になって、主治医に病状をお聞きしたんです。発見が遅れたために、リンパ腺、膵臓、肝臓、に転移しているといわれました。それで、ガン保険に加入してるので、やれるだけの治療をお願いしますと訴えました。主治医は先進医療治療をやってみます、とおっしゃられたんですが、そのかいもなく、亡くなりました」

27

伊達は、鈴木課長の動向から、自分の考えを話した。「そうですか。鈴木課長は、お見舞いというより、ご主人と何か話したかったということです。いや、何かを聞き出したかったんじゃないかと推測されます。だから、しきりに、面会を訴えたんです。鈴木課長は、ご主人と菅原さんだけが共有する秘密を聞き出したかったんだと推測されます。ご主人がお亡くなりになった今、鈴木課長は、菅原洋次さんを、必死になって探しているに違いありません。おそらく、菅原洋次さんは、追ってから身を守るために、行方をくらましたのでしょう」

真由美は、顔をしかめて尋ねた。「主人は、会社にご迷惑でもおかけしたのでしょうか?」伊達は、静かに返事した。「その点は、わかりません。でも、鈴木課長の様子から、会社と何らかのかかわりのある事件に巻き込まれていることは確かです」真由美は、一瞬、不愉快な表情を見せたが、笑顔を作り、事件性を否定するかのような旅の話題を持ち出した。「そう、菅原さん、写真が趣味だったんじゃないかしら。それと、お城巡りが、お好きだったみたいですよ。そう、そう、会津若松城、松本城、駿府城、姫路城、熊本城、などの写真を見せていただいたことがあります。きっと、もうしばらくしたら、元気で戻られるんじゃないですか」

沢富に目配せした伊達は、頭を下げると立ち上がった。「はるばる福岡からやってきたかいがありました。とても参考になりました。三ツ星運輸の鈴木課長にも、お話を聞く予定です。菅原さんの失踪には、深い事情があるように感じられます。もしかしたら、何らかの連絡が市毛様にあるかもしれません。その時は、ぜひ、勇気をもって、私たちに連絡いただけませんか。菅原洋次さんの身の上に危険が迫っているのであれば、一刻も

早く、保護しなければなりません。ぜひ、ご協力をお願いいたします」真由美は、金輪際、警察とはかかわりたくないと思ったが、小さくうなずいた。

28

市毛真由美は、何もヘマなことは言ってないと思ったが、二人の刑事が去った後、刑事の訪問について、樋口に報告することにした。スマホで樋口を呼び出すと 2 回の呼び出しで応答がった。「はい。樋口です」真由美は、手短に報告した。「ちょっと、今、よろしいですか?」樋口の「はい」と言う返事の後、真由美は話を続けた。「今日、二人の刑事が、福岡からやってきました。主人のかつての同僚について、いろいろと聞かれました。主人に関しては、打ち合わせの通りのことを話しておきました。別に問題はないと思いましたが、ご報告をと」

樋口は、冷静なトーンで返事をした。「そうですか。ご主人に関しては、ガンでの死亡が確定していますので、まったく問題ありません。ところで、同僚の方が、どうかなされたのですか?」真由美は、即座に返事した。「同僚の方が、旅に出られて、3 か月が経つそうなんですが、何の連絡もないそうなんです。行き先に、心当たりはないか？ と聞かれましたが、何も存じ上げません、とお答えいたしました」樋口は、小さくうなずいた。「そうですか。別に気にすることは、ありません。また、何か気になることがございましたら、ご連絡ください。神のご守護を信じましょう。日々、お祈りをささげてください」

電話を静かに切り終えた時、樋口の脳裏にドクター X の顔が浮かんだ。念のために、刑事の件を伝えることにした。3 回の呼び出しで、ドクター X のダミ声が響いてきた。「何だ、今頃。電話は、まずいと言ったはずだぞ」樋口は、手短に伝えた。「今、電話が

あって、市毛宅に警察が来たそうです。市毛武史に関することではなく、彼の同僚について、尋ねられたそうです。もしかしたら、先生のところにも、行くのではないかと」ドクターXは、即座に返事した。「そんなことか。わかった。切るぞ」樋口は、市毛武史はすでに病死しているから、全く問題ないと確信していたが、福岡からやってきたという刑事のことが気にかかった。

29

伊達と沢富は、市毛宅前の小路から大通りに出るとタクシーを探した。次の鈴木課長との約束時刻は、5時半。まだ十分、時間があった。タクシーで横浜公園近くにあるスタバに到着すると周りに人にいない窓際の席に腰掛けた。伊達は、腕組みをしてうなった。「う〜〜、浮気の家出では、なさそうだ。もしかしたら、ヤクザに追われているのかもしれんな。サワ、どう思う?」沢富もそのように感じていた。「市毛の奥さんの話からすれば、ヤクザが絡んでますね。二人は、全国各地を飛び回るトラックの運転手でしたよね。ということは、ヤクザがらみのブツを運んでいたと考えていいんじゃないですか?二人は、そのブツを持ち逃げしたんじゃないでしょうか?」伊達もそう考えたが、市毛武史は、ガンで死亡している。となれば、菅原洋次が隠し持っていることになる。ブツとは、現ナマか?「そうだな〜〜、持ち逃げするとなれば、現金だよな。市毛は死んでいるから、菅原が持っていることになる」伊達は、単なる家出とのんきに構えていたが、菅原と市毛が元ヤクザと知って、不吉な事件になるような予感がした。

約束時刻の20分前に席を立った二人は、スタバを出ると信号待ちのタクシーをつかまえた。伊達は、行き先を横須賀街道沿いにある三ツ星運輸と伝えた。約10分ほど走ると大きなゲートを構えた本社前に車が止まった。本社ビルの北側には、巨大倉庫と大型トラックが並んでいた。受付で鈴木課長との約束を伝えると2階の応接室に案内された。ソファーに腰掛け、壁に掛けられたフランスのブドウ畑を描いたような風景画を眺めて

いると小さなノックの後に小柄な眼鏡をかけた中年男性が姿を現した。固まった表情の彼は、名刺を差し出し、挨拶した。「総務課長の鈴木です。退社した菅原洋次について、お尋ねされたいということですが、何か?」伊達は、まず、退社した理由を聞くことにした。「早速ですが、菅原洋次さんの退職理由をお聞かせ願いませんか？」鈴木課長は、即座に返事した。「一身上の都合です。よくある理由です」

伊達は、鈴木課長の動向を探った。「奥様の話では、福岡までこられて、菅原さんの所在をお聞きになられたとか」引きつった顔の鈴木課長は、弁解がましく返事した。「いや、まあ、菅原さんは、優秀な社員でしたので、できれば、続けてほしいと思いまして、お願いに参った次第です」伊達は、嘘だと察したが、このことから、本当の理由を隠していると確信した。「さようでございますか。では、市毛さんも、同じ理由で、お見舞いに」苦笑いした鈴木課長は、うなずいた。「お二人は、長年コンビを組まれてまして、ともに、優秀な社員でした。是非、病気が治られた際には、わが社に戻って来ていただきたいと」マジな顔で出まかせが言えるものだとあきれたが、これで、ますます疑いが増した。「菅原さんは、小旅行に出られたということですが、どこか、心当たりは?」

30

目を丸くした鈴木課長は、返事した。「それは、こちらがお聞きしたいくらいです。私は、全く心当たりはございません。もし、所在が判明したならば、ぜひ、ご連絡いただきたい」鈴木課長は、必死になって、菅原洋次を探していると察した。やはり、なにか重要なブツをもって、姿を消したに違いない。「優秀な社員に、戻ってきていただきたい、ということですね。もし、所在が判明すれば、ご連絡いたしましょう。まいりましたな～、菅原さんは、いったいどちらに行かれたのやら。奥さんが、心配なされているのに」鈴木課長も同意した。「全く、美人の奥さんをほっぽらかして、姿を消すとは、言語道断です。戻ってきたら、説教してあげます」タヌキ親父とこれ以上話してもらちが明かないと判断した伊達は、引き上げることにした。

伊達が立ち上がろうと腰を少し持ち上げた時、沢富が質問した。「あと一つ、いいですか?9 月末に、ガンで亡くなられた市毛武史さんのことなんですが、この会社では、毎年、健康診断なされてますよね。今年の健康診断で、ガンの疑いがありましたか?」鈴木課長は、素直に返事した。「いいえ。4 月の健康診断では、まったく健康でした。ガンが発見されたのが、6 月でしょ。ガンって、そんなに突発的に、できるものでしょうか?しかも、入院して、3 か月で亡くなられるなんて。今でも、信じられません。まったく、お気の毒です」沢富は、伊達を覗き見て、うなずいた。二人は、挨拶をして応接室を出た。

通りでタクシーを拾った二人は、横浜駅西口近くのビジネスホテルに向かう前に、食事をすることにした。二名を予約し、個室のある”うたげ”に向かった。堀ごたつ席につくと伊達が口火を切った。「今回の出張は、無駄骨と思っていたが、そうでもなさそうだぞ。ヤツは、家出というより、逃亡だ。もしかしたら、これ、に追われているのかもしれん。おそらく、課長も、これ、にかかわっているんじゃないか?」伊達は、これ、といった時、人差し指をほほに当てた。「確かに。できれば、我々が先に保護したいものです。そうでないと、かなりヤバいですね」伊達はうなずいた。「今のところは、単なる家出だ。事件性はない。大掛かりな捜索はできない。どうやって、探し出せばいいんだ」

31

沢富が、気にかかっていることを話し出した。「ちょっと気にかかることがるんです。市毛武史の病死の件ですが、どうも、納得がいかないんです。鈴木課長も言っていたように、突然ガンになって、3か月でなくなっています。これって、ちょっと、変じゃないですか?」伊達は、意味がよくわからなかった。「変ってことはないだろう。ガンなんだから、そういうこともあるんじゃないか。俺は、医者じゃないから、よくわからんが」沢富は、小説で読んだ替え玉死体の話をすることにした。「あくまでも、小説の話なんですけどね。ある物理学者が、マフィアに狙われていましてね、そこで、この世から自分を抹殺するために、親友の医者に頼んで、死亡診断書を書いてもらったんです。しかも、ご丁寧に、身代わりを使って、火葬までしたんです。まさかと思うんですが、市毛がこの手口を使ったってことはないかと」

伊達は、あきれた顔で返事した。「まさか、市毛は、トラックの運ちゃんだぞ。そんな込み入ったことを思いつくか?実際に、死んでると思うがな～」沢富は、伊達の反論にうなずきながらも、偽死亡診断書手口にこだわった。「でも、ですよ。もし、数億の金を、持ち逃げしていたとすれば、どうですか?医者に、大金を積めば、ウンと言ったんじゃな

いかと思うんです。もし、本当に、大金を持ち逃げしたと仮定すると、ヤクザから逃れるために、戸籍上は死んだことにして、どこかで生きているように思えて、ならならないんです」いつもの沢富の妄想が始まったと顔をしかめたが、捨てがたい発想には違いなかった。「まあ、考えられなくもないが。市毛武史は、生きていて、どこかに潜んでいる、と言いたいんだな」

沢富は、さらに想像をたくましくした。「大金を手にしたとなれば、整形手術の可能性があります。二人とも、全く顔が変わっているかもしれません。そうなれば、発見できません」伊達は、あきれ返った表情で返事した。「そうだとすれば、お手上げじゃないか。何を手掛かりに、捜索するんだ。あほらしい」沢富は、気まずい表情をしたが、可能性は否定できなかった。「考えすぎですかね。整形手術をする前に、菅原洋次を発見しましょう」伊達は、眉を下げて暗い表情をした。「でもな〜。今のところ、まったく、手掛かりがない。どうやって、探し出すんだ」沢富は、ニコッと笑顔を作って返事した。「刑事は、足です。身を隠すために、ひきこもったとしても、菅原洋次は、かつてチンピラの遊び人です。きっと、女欲しさに、歓楽街に足を運ぶはずです。根気良く、聞き込みをやりましょう。そう、ひろ子さんにも、写真を手掛かりに、協力してもらいましょう」イラついてきた伊達は、ゴクゴクと喉を鳴らし、一気に、ジョッキを空にした。

死神サークル I

著　　春日信彦

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社